

論文の和文要旨	
論文題目	現代日本語のアスペクト論
氏名	須田義治

〈はじめに〉

この論文は、現代日本語の動詞のアスペクトをテーマとしている。現代日本語の研究のなかで、アスペクトの研究は、比較的 研究のすすんだ分野であるといわれている。たしかに、おおくの研究者がアスペクトについての研究論文を発表しているし、日本語のアスペクトに関する記述的な研究によって、おおくの事実があきらかにされている。

しかし、理論的な問題についての議論は、ほとんどなされていないといっている。文法的なカテゴリーという概念が、日本語についてもとりあげられ、日本語にも文法的なカテゴリーとしてのアスペクトが存在するといわれているも、文法的なカテゴリーとは、なんなのか、日本語において、アスペクトをどのように文法的なカテゴリーとしてみとめるのか、という問題は、まったくとりあげられていない。唯一、理論的な問題を論じているのは、奥田靖雄氏の「アスペクトの研究をめぐって」(1977)である。その後、およそ二十年のときをへだてて、工藤真由美氏は、『アスペクト・テンス体系とテキスト』(1995)という著作において、アスペクトの体系をあきらかにしている。しかし、基本的には、工藤氏は、奥田氏の理論にもとづいており、そのうえに、自分のものをつけたしている。つまり、奥田氏の提出したアスペクトの理論をめぐって、いままで、まともな議論がなされたことはないといえる。奥田氏の論文は、1977年の時点では、まちがいなく、画期的な論文であり、それまでの研究のレベルを一気にひきあげたといえるだろう。しかし、こんにちの段階からみれば、訂正しなければならない点もおおく、実際、奥田氏自身も、修整をおこなっている。これからの日本語のアスペクト論を確立するためには、奥田氏の提出した理

論的な問題を、こんにちのアスペクト研究の段階から、もう一度検討してみなければならない。

第一章 これまでのアスペクト研究における問題点

そこで、第一章では、いわゆるアスペクトの研究史ではなく、奥田氏のアスペクト論を徹底的によみといていく。奥田氏のアスペクト論は、筆者のアスペクト研究の出発点をなしているだけでなく、ひろく、日本語のアスペクト研究の基礎のひとつをかたちづくっている。しかし、奥田氏のアスペクト論には、おおくのあいまいな点があり、術語において誤解をまねきやすいところもある。それらを明確にし、訂正し、奥田氏のアスペクト論の構想を、そのあるべきすがたにすることが、この論文全体の目的でもある。したがって、本論文は、奥田氏のアスペクト論の基本的な構想をうけつぐものであるが、奥田氏の論文に対して、もっとも内在的な、根底的な批判をおこなう。とくに、検討の中心をなしているのは、「している」の形のアスペクト的な意味に作用する動詞分類として、金田一春彦氏の継続動詞と瞬間動詞という動詞分類を、動作動詞と変化動詞に規定しなおしたことである。その動作と変化という概念は、奥田氏のいくつかの論文にでてくるのだが、ときがたつにつれて、その概念の規定がかわっていく。このことは、奥田氏の理論の発展の過程とみることができるが、そのことを、奥田氏自身は、はっきりとかたっていないし、そこに、さまざまな矛盾があらわれてもいる。

また、1977年の奥田氏の論文によって、日本語における形態論的なカテゴリーの理論が確立されたともいわれることがあるが、言語学における形態論についての、さまざまな議論の歴史をかんがえれば、それは、先駆的なものにとどまるものであり、完成されたものではない。そこで、形態論的なカテゴリーに関する奥田氏の叙述をおっていき、再検討する。

第二章 完成相と継続相のアスペクト的な意味について

第一節 アスペクト的な意味の体系性について

ここでは、アスペクト的な形の個別的な意味の体系化をめざしている。これまでのアスペクト研究において、アスペクト的な形の個別的な意味は、かなりの程度、くわしく検討されているのだが、基本的な意味と派生的な意味とが区別される程度で、意味の列挙におわっているばかりも、すくなくない。

「する」の形と「している」の形の個別的な意味のなかで、まず、中心的な意味として、限界到達性と過程継続性とをとりだす。それは、動作の展開の仕方という動作の内的な時間構造をあらわすという、アスペクトという文法的なカテゴリーをもっともよくあらわす、そのカテゴリーを代表する意味である。「する」の形には、さらに、動詞のさしめす動作が生じたという事実をあらわす、全体的な事実の意味という基本的な意味がとりだせる。これは、もっともコンテクストにしばられていない、自由な意味である。中心的な意味は、動作を時間的に位置づける基準時点が発話時＝現在におかれたときに、あらわれる。基本的な意味は、基準時点が過去と未来におかれたときに、あらわれる。

そのほか、周辺的な意味として、過程性と非過程性との対立をとりだしている。反復的な動作は個別的な意味としてあげられていることがおおいのだが、反復的な動作は、スル

形もシテイル形もあらかわすのであって、反復的な動作が個別的な意味であれば、一回的な動作も個別的な意味になってしまう。動詞が反復的な動作をあらかわしているばあい、スル形とシテイル形とで、アスペクト的な意味は、非連続的な（反復的な）過程の表示と非表示との対立となっている。スル形とシテイル形との対立を考慮にいれずに、個別的な意味をとりだしているのは、奥田氏の基本的な構想がまもられていないことを意味しているとおもわれる。

また、パーフェクト的な意味も周辺の意味と位置づけているのだが、これについては、問題があるだろう。パーフェクトについては、第三章と第五章第一節で、くわしく検討している。

第二節 時間的なありか限定性について

ここでは、動詞のあらかわす動作を、時間軸との関係の仕方によって、時間的なありか限定をうけている動作とうけていない動作とにわけている。そして、時間的なありか限定をうけていない動作には、反復性と習慣性と時間的な一般性をとりだしている。この時間的なありか限定性という特徴は、アスペクトとテンスの意味の実現の土台をなして、どのようなアスペクト的な意味を実現するか、アスペクト的な形の対立をもつか、などに作用している。すなわち、時間的なありか限定をうけている動作は、完成相と継続相とのアスペクトの対立をもつが、時間的なありか限定をうけていない動作は、その対立が、まず、意味的にうしなわれ、もっとも時間的なありか限定がよわい、時間的な一般性では、完成相しかとれないというように、形式的な対立の欠如をしめすのである。

第三章 アスペクチュアリティーの体系

ここでは、アスペクチュアリティーの体系について、検討している。

まず、日本語において、スル形とシテイル形とが、どのような資格において、形態論的なカテゴリーとよぶことができるかを検討している。そして、「しつつある」「しようとする」や「してある」「しておく」などが、アスペクチュアリティーの体系のなかで、その中心をなすスル形とシテイル形に、どのようにかかわっているかを、あきらかにし、アスペクチュアリティーの体系の構築をめざしている。さらに、「しはじめる」「しつづける」「しおわる」を段階動詞とし、「しらべあげる」「おいつく」などの動作様態（アクションスアルト）と区別している。動作様態については、限界動詞と無限界動詞の下位タイプとして位置づけ、その、かんたんなリストをつくっている。

第四章 アスペクト的な意味に作用する動詞の語彙・文法的な系列について

第一節 限界性について

ここでは、アスペクトにかかわる、動詞のさししめす動作のもつ、もっとも一般的な意味特徴である限界性について検討している。その中心は限界動詞と無限界動詞という動詞分類である。この動詞分類は、動作動詞や変化動詞より一般的なものであり、より上位におかれる。

限界動詞は、完成相で限界到達性をあらかわし、継続相で限界到達後の段階をあらかわす。無限界動詞は、おおくのばあい、継続相で過程継続性をあらかわしているのだが、完成相で

つかわれると、動作の発生やあらわれをあらわすことがある。動作の発生やあらわれを、限界の一種とすれば、無限界動詞も完成相で限界到達性をあらわしていることになり、継続相のあらわす過程継続性は、やはり、限界到達後の段階となる。

第二節 活動について—動作様態（アクチオンスアルト）（1）—

ここでは、これまであまりくわしく分析されることのなかった動作について検討している。人の動作のなかには、その時間的な性格によって、ある時点において観察可能な具体的な動作から、ある時点において観察することのできないような非具体的な動作がある。その表現手段における、動詞の語彙と文法との相互作用の仕方をあきらかにしながら、それらが、どのような階層をなしているかをあきらかにしている。そして、〈うごき〉「はしる、およぐ」、〈行為〉「おく、しまう」、〈活動〉「はたらく、あそぶ」、〈作業〉「つくる、たてる」、〈生活様態〉「経営する、愛用する」などの、動作のタイプをとりだしている。〈うごき〉は、時間的なありか限定をもっともつよくうけている動作であり、アスペクトの対立をもつが、〈生活様態〉は、時間的なありか限定をもっともよわい動作であり、おもに、継続相でつかわれる。

第三節 特性と関係について—動作様態（アクチオンスアルト）（2）—

ここでは、これまでアスペクト研究において、アスペクトの対立をなさないことによって、ほとんどあつかわれてこなかった、特性や関係をあらわす動詞を検討している。これは、アスペクトの対立をもたないので、奥田氏によって、アスペクトの研究からはずされた。しかし、アスペクトの対立をもたない動詞も、アスペクトの体系のなかに位置づけようとする立場からは、この種の動詞が、どのようなものであるかをあきらかにすることも、アスペクト研究の一部となる。しかし、そうでなくても、これらの意味が、動詞の、形式的にはアスペクト的な形によってあらわされているのなら、どのような意味的なタイプがあるのかをあきらかにしておくことも必要であるとおもわれる。〈外的な特徴づけ〉「まがっている、とんがっている、がっしりしている」、〈論理的な関係〉「よる、かかる、もとづく」、〈記号論的な関係〉「さししめす、意味する」、〈空間的な関係〉「位置する、面する」などをとりだしている。

第五章 パーフェクト研究における、いくつかの問題

第一節 パーフェクトの体系について

ここでは、パーフェクトの体系の概観をしている。パーフェクトとは、なにかをあきらかにするために、アスペクトとテンスについても、説明している。

パーフェクトの体系のなかで、まず、基準時点をしめすテンス形式をもつかどうかで、明示的なパーフェクトと非明示的なパーフェクトにわけると。明示的なパーフェクトには、論理的な関係をあらわす事実性という意味と時間的な関係をあらわす先行性という意味がとりだせる。そして、事実性は、「している」の形や「したことがある」などがあらわし、先行性は、「している」の形や「してある」などがあらわす。非明示的なパーフェクトは、「しておく」や「した」などがあらわす。

「している」の形のあらわすパーフェクトについては、その意味と機能が、工藤真由美

氏によって詳細にあきらかにされている。そのため、この論文では、工藤氏があまりふれていない部分について検討している。

第二節 「している」の形のパーフェクト的な意味に対する動詞の語彙的な意味の作用

ここでは、「している」の形のあらゆる動作パーフェクトの実現に、動詞の語彙的な意味のちがいは、関与しないという工藤真由美氏の見解に対して、留保をくわえている。「している」の形のあらゆる変化の結果の継続のように、動詞が変化をさしめしていなければならないというような、つよい制約はないのだが、動作パーフェクトの実現には、動詞が限界的な動作をあらわしていることが関連している。また、これまでくわしい検討がなされなかった、「している」の形で動作パーフェクトしかあらわさない動詞「戦死する、自殺する、脱税する」などについてあきらかにしている。

第三節 パーフェクトのコンテクスト的な機能について

ここでは、「している」の形のあらゆる動作パーフェクトが、どのようなコンテクスト的な機能をはたしているか、あきらかにしている。先行性をあらゆるパーフェクトは、他の動作との時間的な関係をあらわし、あるばあいには、因果関係をもあらわしている。事実性をあらゆるパーフェクトは、〈事実の確認〉、〈論理的な関係〉、〈説明のつけくわえ〉として、はたらいている。

第六章 小説の地の文におけるアスペクト

第一節 小説の地の文におけるアスペクト・テンス的な意味について

ここでは、小説の地の文の「した」「していた」「する」「している」の形の使用について検討している。このテーマについては、すでに、工藤真由美氏が、論文をかいている。それは、よりひろい範囲をあつかったものであるが、筆者は、対象を外的な出来事の提示部分に限定して、工藤氏の論を再検討するという形で論じている。ここには、おもに、完成相・過去形をめぐっての、工藤氏と筆者との、アスペクト的な意味のとりえ方のちがいが、はっきりとあらわれている。工藤氏によるアスペクト的な意味の規定では、小説の地の文のアスペクトとテンスについて、説明できないことをあきらかにし、歴史的な現在と違ってすますことのできない、地の文における完成相・非過去形「する」のアスペクト的な意味などについて、説明している。

第二節 小説の地の文における動作の間の時間・意味的な関係の諸タイプについて

ここでは、「する」の形と「している」の形のコンテクスト的な機能とされている継起性や同時性が、時間的な関係のうえに、「条件づける動作と条件づけられる動作」「主要な動作と副次的な動作」「知覚する動作と知覚される動作」などの意味的な関係を発展させていることをみる。それが、動詞のアスペクト的な形だけでなく、動詞のあらゆる動作のタイプなどによって、形づけられていることにもとづき、個々の動詞、個々の文、そして、それらのくみあわせなどから構成されるテキスト論を展開している。